

人痘法についてのメートランドの報告

小田 泰子

イギリスの外科医チャールズ・メートランド（二六六八一—七四八）はトルコ大使館付医官としてコンスタンチノーブルへ行き、そこでウォートレイ家の大使の息子の人痘接種に立ち会った。

帰国後、メートランドはウォートレイ家の娘に人痘接種を行つた。さらに、ウエールズ公妃が発案した、人痘法の安全を確かめるためにニューゲートの囚人に人痘法を行う実験が行われたときに、六人の囚人に接種を行つたことが知られている。

この度、イェール大学医学図書館でメートランド自身が書いたこれらの事実に関する報告を発見した。これは縦十九センチ横十二センチ、四十ページの小冊子である。（図1・一七二三年に発刊の第二刊表紙。この報告に一七二二年二月のことについての記述があることから、初版は一七二二年と推定される。）

メートランドが見出し、実行した人痘法については、これまで多くの著者、古賀十二郎、アーノルド・クレブス、古川明らが触れているがそれぞれに食い違う点があり、その正確な内容は知られていなかったのではないかと考えられる。

この報告にはメートランドがトルコで見聞した人痘法のことで、ウォートレイ家の子供たちに行われた人痘法、イギリスで論じられている人痘法の効果に対する疑問とメートランドの考え、ニューゲートの囚人に行つた実験、その後メートランド自身が行つた人痘法などが記されている。

これを書いた理由としてメートランドは、彼の行つたことについて、多くが語られているが、それがしばしば事実でないことがあるので正確な事実を報告するため、としている。もし、メートランドがここに書いていることがすべて正しいとするならば、これまで言われていたことには、メートランドが言うように、多くの嘘の記述が含まれることになる。

以下にメートランドの報告を全訳した。

『天然痘にたいする人痘法の報告』

私が引退して田舎に帰ってから、私がニューゲートで行つた人痘法の実験について多くが語られ、それも、しばしば事実でないこと、矛盾していることなどがあることを発見したので、誤解されて、将来、この術が恐れられることがないように、正確な事実を報告しようと考えた。

ここで私は天然痘の理論についての論文を提供したり、最高の治療を試みたりするつもりはない。そのようなことは学識のある紳士たちに任せる。彼らはこれまでなされた最良とされる発見や観察にもかかわらず私に同意するであろうことを私は疑わない。と言うのは、天然痘は非常に致命的な性質

の疾患であるので、適切な治療法を持つにはほど遠く、多くの場合、最も権威のある医師もその治療に非常に苦労しているからである。

人々は率直に言う、ただこの病気に罹るしかない。何かよいことをするというだけの観点から、私はこの恐ろしい、悪性の病気が人類を解放し救う方法を公表し、世に問うことにしたい。

ここに提示する方法は、人痘法によって天然痘に罹らせるという非常に簡単な方法である。この方法はここイギリスでは新しく、最近まで全く知られていなかったが、トルコでは六十年以上も前から、また、アジアのある地方では数百年も前から広く行われ、成功している方法である。ここで私が勧める術は、文盲の人々の間で行われていたもので、学問や修辭によって装飾されることなく、非常に簡単で、最も卑しい立場の人に適しているかもしれない。それで、人々はこの安全で有用な方法をより高い位にあり、より繊細な嗜好をもつ人々には適合しないと考えるかも知れない。しかし、一般にこのような人がとくにこの病気に罹るのである。数か月前には、その行く手にあるものをすべて破壊し、それを止めようとする人間のすべての手段を秘密結社のようなこのひどい疾患によって、偉大なる家族に大混乱があったことが知られている。

そこで、この病気とその後に残る醜い結果を一番恐れる彼らとその子供たちにとっては、この術は歓迎すべきものと考

えられよう。この術が生まれたところにある、あまり言いたくはないが、怠惰、よくない場所、たぶん悪い素因などがこの安全で有用な術の息の根を止めることを懸念したので、ここでは、それに反対してあげられる疑念と反論を少なくするように努力する。そのために最初に私がトルコとロンドンで見たり、行ったりしたことの歴史的な報告を手短にする。

一七一七年、私はコンスタンチノーブルに赴任するイギリス大使とその家族に付き添う榮譽をもった。ここで、私は以前から開いていた有名な術、すなわち接種によって天然痘に罹らせる術を十分に知るすばらしい機会に恵まれた。

私の調査は二つか三つの部分に分けられる。すなわち、私はその方法に満足しうるか、その方法の力強い利点と安全性を信じるか、それに対する私の強い疑念と問題点が解消し、偉大なる道に向かうかであった。

数世紀にもわたり、人間にたいする恐ろしい鞭であるこの伝染性の疾患は、最初エジプト、アラビア、その他の東国で始まったと聞いていたので、まず、つぎの調査をするのがよいと考えた。第一の調査は、この疾患は当時ロンドンや他のヨーロッパを襲っていたが、トルコでもまだ、昔と同じ強いやりかたで、猛威をふるっているのかということである。というのは、もし、ここで流行しているのが我々の国のものよりも、より穏やかな種類の天然痘であるならば、なぜ人々はその取り除くためにこの非常に奇妙な方法を続けるのか。

このことについては、すぐに、この国の天然痘はイギリス

よりも悪性で、流行性が強いことを私の目で確かめた。ある人はこの疾患に罹った人の半分、少なくとも三分の一は死亡するし、死を免れても恐ろしい醜形が残ると語った。

つぎに、この新しい奇妙な術に伴う症状はどのようなものか、この術は常に好意的に受け入れられるのかを調査した。

接種をして後、発疹が出る前後に起こる身体の違和感は非常に軽度で穏やかであつて、自然の天然痘では常にある背中の痛み、嘔吐、頭痛、のどの渴き、不安感などはなく、脈が以前より少し充ちて高くなる程度で、厳密には病気とはいえないほどである。また、発熱についても熱という名にも値しないほど微かで、これで身体が弱い人は非常にまれで千人に一人もいない。

最後に、私が少なからず大事なことを考えた膿疱の数は多いか少ないかを聞いた。一般に十個から百個であるが、ときにはそれ以上が出る。しかし、切開した所、すなわち接種した場所以外には決して痕を残さない。

しかし、それが解決されなければ全体が無意味になると私が考えた最大の問題があつた。それはこの術を受けたすべての人は本当に将来天然痘に罹らないか、ということである。もし、私がこれを確信しさえすれば、自分でこの術を行い、他の人にも確信をもって勧めることができると考えた。

この調査も、ここで十分に、期待以上に答えが出た。というのは私をだまそうと考えるはずもないすべての人によつて、これまで、人痘法によつて膿疱が出た人は、その膿疱の

数がどんなに少なくても、その後天然痘に感染した人はいないと保証したからである。また、そのことを試すために、ある者はもう一度接種され、ある者は天然痘に感染している者と同じ部屋に閉じこめられ、同じベッドで寝ることさえも強制されたという。

これを聞いて私は喜んだ。このことから私はこの術が普遍的に安全であり、有用であると結論した。イギリスでこの術に関する忠実な報告が一度ならず伝えられてからこれまで、公平で完全な試みがなされていらないには少なからず驚いた。

また、この方法を発明した人の偉大なる賢明さ、入念な観察、注意深い実行とそれを忠実に周りに伝えたことを賞賛せざるを得ない。彼らは実際にその利点を知り、その効果を発見したのであつた。

さて、私が仕えた大使の頭のよい夫人はこのころ彼女の好奇心を満足させるために努力し、この術を観察した。そして、この術の安全性を確信したので、彼女の六歳になる末頼もしい一人息子にこの術を受けさせる決心をした。

彼女はまず私に材料を採取するに適した人を見つけることを命じた。つぎにこの方法を非常に長い間行ってきたギリシヤの老女を呼んだ。私は、苦勞して材料を採取する適切な人を見つけ、その女性に仕事に取りかかしてもらつた。しかし、彼女の手はひどく震え、彼女の使う鈍いさびた針でその子供に苦痛を与えた。この子は勇気のある子供でこれまでそのく

らしいことでは泣いたことがない子供であったので、私はその泣き声を聞いてかわいそうに思った。それで、もう一方の腕の接種には私の道具を使った。痛みが少なかったたので、今度は彼は苦情を訴えなかった。

術は、両腕ともに行われ、完全に成功した。それから三日後に数個の鮮紅色の斑点が顔に出て消えた。このことは(一般に観察されることであるが)七日目まで続いた。八日目の夜間に数時間の間少し熱感があり、のどの渴きが観察された。それからかなりの数の天然痘が現れた。それは穏やかな孤立性の天然痘の発疹に似た円い黄色い膿疱であった。最初に出た赤い斑点が一番大きく腫れたが、数日後には痂となり徐々に乾いて落ちた。それで若い紳士は直ぐ外出できるような状態になった。彼の身体には百個以上の膿疱が出たが、私がこれまで述べた以外の異常はなかった。痂が落ちた後には一個も、どんな痕も残らなかった。この術はコンスタンチノーブルの近くのバラで一七一七年三月に行われた。

上記の尊敬に値する夫人はその三か月前に女兒を出産していた。息子に行われた術のすばらしい成功を見て、この幼児にも試そうと考えたが、当時はなにかの理由で保留された。ともあれ、私はこの完全に安全な術がイギリス人、とくにこれまでこの致命的な疾患に悩まされてきたイギリス最高級の地位にある人たちのために、最初にして偉大なる例となったことを喜ぶものである。

この気高い夫人はこの四月に私を呼んで、彼女の娘に人痘

法を受けさせる決心をしたので、私にその目的に合う材料を直ちに見つけることを希望した。私は一、二週間遅らせるようにと願った。というのは天候が寒く、湿気が多かったからである。また、実際、ここでは全く新しく、行われたことのない実験を寒い季節にする危険を犯したくなかったのである。現在では私は相當の注意を払えばどのような季節に行ってもよいと確信してはいるが、それでも天候のよいときの方がより安全である。

それから、私は彼らが適當と考える二人の医師を呼ぶように頼んだ。その医師は子供の健康状態を診るだけではなく、この術の目撃者となり、その信頼と評判に貢献することを願ったからである。最初はこの立ち会いの件は秘密にしておきたいからか、それともなにも起こらないと信じていたからか、拒否された。

間もなく適當な材料を見つけたので、私は子供の両腕に普通の方法で接種した。幼児であったので身体の清潔な状態や規則正しい食事習慣から必要はないと考えたので、子供には瀉血もしなければ、下剤の投与も行わなかった。彼女には十日目まで普通に起こる小さな斑点や発赤以外には変化は起こらなかった。十日目の夜になって、少し熱が出た。近所の古くからの薬剤師が呼ばれた。彼は、慎重に、なにも危険はないし、熱は直ぐ下がるから、どんな薬も与える必要はない、と言った。その通りになって、翌朝に天然痘が始まった。これは通常よりも二日遅いが、切開したところから通常以上の

分泌があつたためであろうと考える。

三人の学識のある大学の医師が呼ばれて、代わる代わるこの子を診察した。彼らはすべて名譽ある紳士であつた。彼らは、これまで同様、また今後もそうであるように、ウォートレイ嬢は天然痘を接種されながら、元気に部屋で遊んでおり、数日後には完全に回復したと宣言することになつた。

数人の夫人や有名な紳士もこの若い患者を訪れ、この事実を証明した。これまでの例と同じであるので、二、三の過程についてこれ以上述べる必要はない。ただ、膿疱はそんなに多くはなかつたし、熟するのに早すぎることはなかつた。このことは天候の差を、ほとんど、または全く考慮しないで完全に施術が可能だという説明になるであろう。というのはコーカシア人とイギリスよりも寒く扱い難い気候のもとに住んでいるカスピ海沿岸の住民にそれを行うに当たつて全く差がないからである。

この術をさらに確実なものとするために、もう一つの例を提供する。すなわちウォートレイ嬢を診た学識のある上述の医師の一人は以前からこの方法を知つていた。今、その安全性と合理性を知り満足し、ついに、彼自身の家族にこれを試みる決心をした。彼は以前に悪性の天然痘で数人の子供を亡くしたことがあつた。それで、残された一人息子に直ぐ接種することを私に望んだ。その子はまだ六歳になつてはいなかつたが、かなり活発な血色のよい子供であつたので、その医師は五オンスの瀉血をすることを命じた。それから十日後に

満足できる材料が見つかったので、少年の両腕に接種した。これは五月十一日に行われた。翌日切開したところに炎症があつた。それで、私は成功したことを確信した。三日目にこめかみのところに赤い斑点が出、七日目と八日目の間に二、三個の膿疱が現れた。少年はこの間中、のどの渴きも頭痛もその他の異常も訴えなかつた。ただ彼の脈はより充ち、より早いことが観察された。十日目と十一日目にもう数個の円い膿疱が出た。しかし、二、三日で乾いた。切開したところはこの間中炎症があり濃くてよくこなれた膿が分泌されていた。

ここに私はトルコで非常に多くの人に人痘法が行われ、常に確実に成功していることを証言できる。私はコンスタンチノーブルで、医師の軽率と怠慢による一例の失敗例を知るのみである。私はこの術を秘密にするつもりはない。それどころか私の目的は、それを試みる人すべてが注意深くあつてほしいと願うだけである。というのは、悪い結果がときには起きるかも知れないが、それは普通の物事で起こる以上のものではなく、低俗な能力のせいに帰せられるからである。

術そのものは普通の外科手術と同様、簡単で明瞭である。その方法は機械的に習い行うことができるであろう。というのはそれを仕事とする数人の外科医たちはともかく、若いときこれを習い、以来非常に長い間、これを行つてゐるギリシャの老女を知つてゐるからである。

それで、この事実——他の人がした観察や実験を正当に考

慮するならば、術はこれまで以上に安全で最高のもとの評価され、公平な人々すべてがこの術を安全で有用で価値あるものと尊重し是認するであろうと考える。天然痘の強い伝染を阻止し、我々の子供や家族をその病気の猛烈で致命的な結果から、いかにして守るかを知ることには非常に重大なことではなからうか。愛する子供たちが恐ろしい病気で顔かたちが変わったたり、死の苦しみと戦うのを見るときに、両親にとつて子孫の命を守り、顔かたちを守ること以上に大事なことはあるであろうか。我々はしばしば地位の高い家族がペストでと同様天然痘で死に絶え、彼らの称号や財産が見知らぬ人に移行するのを見てはいないであろうか。また、たとえ彼らがそれで幸運にも命を奪われなくても、以前と比べての醜い変化はどうであろうか？ 顔に残るあばた、しわ、傷あとはどうであろうか？ 時には目に膜がかかり、瘻ができ、ときには盲目になることはどうであろうか？ 身体には潰瘍、膿瘍が残り、神経が収縮して一生の脚萎えにさえなることはどうであろうか？ さらに、感染を避けるための不安と心配はどうであろうか？ 恐れと懸念はとくにデリケートで虚弱な人の成長を阻害させるであろう。彼らは、最良の友人や愛する親戚とのすべての交際を避けてはいないであろうか。そして、もし、たまたま治癒したばかりの人に出会ったりしたら、どんなに病気に罹りやすいことか。そして、そのようにしてこの病に襲われた人で、その病気を思わない人はどんなに少ないことか。

要約すれば、このような多くの災難、普遍的で致命的な疾患の避けたい結果を防ぐために、ここで私が勧める方法はこれまで知られていたのでの方法よりも最も安全で、最高の治療よりも絶対確実であることをあえて証言する。

しかし、私はこの術のやり方に関連して二、三の疑念や反対に出会った。これに対しては、以上に述べたことである程度は満足されることを希望する。しかし、ある人はそれが神の掟にかなっていないかを問題にし、ある人はこの術で天然痘が発症したのではないとする。というのは、発熱が先行することなく、通常の病期を伴わないことから、発疹が天然痘によるものではないと考えるのである。

掟にかなっていないかの疑念を呈する人は、この術を僭越であり、自然を無理に変えるものであり、神意を試すものであり、云々と言う。二、三の内科的治療も外科的治療もときにはそうであるが、この術も危険であると一般に疑われているのは本当である。それでもこれ以外の治療が僭越だとも掟に叶わないことにもならない。私はこの重荷を負う用意があるし、この重荷をやさしい心や疑念をもつ人に直ぐに明らかにする用意がある。

しかし、彼らは何を恐れているのか。この術に、非常に上品な繊細な人を恐ろしがらせ、ショックを与えるような、どういふことがあるだろうか。この術は非常に簡単で、合理的で、容易で、悪性の感染を防ぎ、人命を保護することのみを意図するもので、病気にさせたり時期が来る前に力づくで自

然を変えたりするものではなく、潜伏している種を取り除き、どこにもある感染から安全にするものである。我々は疫病予防ということを開いたことがあるが、これが本当にその名に値することを願う。普遍的に試され受け入れられているこの方法が、天然痘に対抗する一つの道であつてはならないであらうか。

また、神意を試すということでは何を意味するのであらうか。彼らは病気を避けるために公正で適切な手段をとることが神意に反すると考えるのであらうか。では、なぜ彼らは発熱を防ぐために瀉血や吐剤や下剤とかその他の治療法を行うのか。なぜ彼らは家族や悲しんでいる人を放棄することを選び、この病気やその他の病気から自由にしてくれる神意を信じないのだらうか。これまでのところ、この方法は神意を試す方法ではなくむしろ神への感謝のもとであり、偉大なる発見であると私は評価する。

このようにして起こされた病気は天然痘ではなく、発疹は自然に起きたものであるとする反対については、非常に合理的であると考える。というのは本当の天然痘にも異なる種類があるが、天然痘の発疹とそれとは紛らわしい例えば水痘の発疹とを区別する唯一の方法は、その発疹の性質と出た時期を観察することによるばかりではなく、最初に発疹の出たところ、それに伴う熱の出具合と症状を観察することにあるからである。知られているように天然痘の病期は症例ごとに異なる。すなわち、病気になった者の体液や習慣など素因によ

つて異なるばかりではなく、外からの感染の程度や量、どのようにして感染を受けたか、軽症のものか悪性のものか流行によるものかによつて異なる。

さて、接種によつて引き起こされた天然痘の病期は自然の天然痘とは少し異なる。一つの相違点は、発疹期が二、三日で、自然の天然痘以上にはならないことである。それから、病期は、侵入期、成熟期、衰退期と分かれるが、この点については、等しくて規則的である。さらに過程は正確で、予後は確実である。

しかし、すべての相違の中で最も重要で実質的なものは熱である。接種によるものでは非常に穏やかでほとんど熱というに値しないものであるに対して、自然の天然痘、とくに融合性のもものは常に猛烈でしばしばそれが死の直接の原因になる。

もし、私の意図するところと全く相容れなく、また、私がここで提案している概説は一貫しないというならば、私はこの相違の原因を簡単にお見せすることができよう。皮膚の毛細血管に挿入された少量の材料は普通の感染の際に起きるような血液を変化させ、溶解させる力がないばかりではなく、発熱に十分な沸騰や、それに続いて常に起きる危険な症状を起す力はない。このような事情にもかかわらず、このようにして挿入された材料は、この後に述べるようにまさしく天然痘の発疹をつくり、よくこなれた膿を出す、自然の感染の場合にある危険で、忌まわしいことは起きない。

このようにして起こされた病気が本当の天然痘であることは、例外なくさらに証明されるであろうが、二、三の簡単な例を追加する。これによって人痘法によってこのように起こされた天然痘が、本当に感染性のあるものであることが分かるであろう。

それは、数人のこれまで天然痘に罹つたことのない成人が、接種で病気になつた三歳の子供の世話をして、実際に天然痘に罹つた事実から明らかである。これが本当の天然痘だとするのに、これよりも強力な証拠が合理的に望まれるであろうか。

ある人を確信させるのにこれ以上の言葉と論争は必要ではない。それともその人は事実によって説得されたくないのであらうか。

私はこれらの事実の報告をあなたに与え、そして、それが正に本当の天然痘であることを保証するのを急いでいる。しかし、そこに至る前に学識のある医師がこの問題に関してした二つの質問について軽く触れる。

第一はこのようにして与えられた病気は天然痘であると私が確信しているか。第二はこのようにして与えられた患者は二度と天然痘に罹らないと約束できるかであつた。

第一の疑問については、私はこれまでこの術を失敗したことはないし、私の知っている限りでも失敗はない。これまで罹つたことがある人以外に、正しく行われれば、これからも起きないことを信じていると答えた。私はある人が保証した

こと、すなわち、世界中にこの病気に罹らない人がいる、と言っていることを非常に疑問に思っているが、私はこの疑問への答えとしてその質問をした医師に「下剤とか吐剤を処方したとき、あなたはいつても効くと確信しているか」と聞いた。というのは私は吐剤を与えて下痢したり、下剤が嘔吐を起すことがよくあり、さらに悪いことにはこれで死亡することもあると聞いていたからである。そのようなことは人痘法ではこれまで決して起きていない。

医師の第二の質問については既にいくらかは述べたが、さらに、トルコでこれまでなされてきた頻回にわたる実験に加えて、接種を二度、三度繰り返す実験が行われたことを追加することができると。私はその目的のために最近ニューゲートの六人の囚人の一人に、公開の繰り返し実験を行い、将来の感染の危険はないことをすべての人を確信させるに十分であつた。これは十九歳くらいのエリザベス・ハリソンである。ここで、私が観察したことを述べると、この少女はニューゲートで接種された五人のうち最も発疹の数が少なく、切開から普通以上の分泌があつた。

まず、私は彼女を雇つて、天然痘に罹つてハートフォードのクライスト病院にいたモス夫人の家の女中を病気の間中世話させた。この女中は非常に重症で融合性と孤立性の天然痘がたくさん出ていた。この女中がようやく回復した後、同じ病気に入院していて、ほぼ同じ病気に罹っている十歳の少年を病気のはじまりから世話し、同じベッドで寝ることを強

いた。彼女は六週間休みなくこのようにしたが、このような場合に看護婦がよく経験するような熱感と小さな吹き出物が数個出たことが一度あったのみで、頭痛も異常も訴えなかった。このことについては大勢の目撃者が証明する事実で疑問の余地はない。

テイモニー医師とピラリイニ医師が『哲学紀要』の三三九号と三四七号で出版した報告をさらに確実にするために、ここに私が述べたことを追加したい。しかし、その限界を超えてこの報告を拡大するつもりはないので、私はそれを他の機会にゆずり、読者にそれを追試する自由を持つに任せることにする。

ニユーゲートにおける実験の報告

一七二二年八月九日、ロンドン

私は宮廷の命令に従い、数人の高名な医師の立ち会いのもと天然痘に対する人痘法を六人の囚人に行った。

その囚人の名前と年齢は以下の如くである。

- 一、メアリー・ノース 三十六歳
- 二、アン・トンピオン 二十五歳
- 三、エリザベス・ハリソン 二十九歳
- 四、ジョン・コートリー 二十九歳
- 五、ジョン・オールコック 二十歳
- 六、リチャード・エヴァンス 十九歳

一七二二年八月九日、水曜日。午前九時から十時の間に、

私は六人全員の両腕と右脚に切開を行った。

十日木曜日、十一日金曜日。メアリー・ノース以外の者には全く変化を見なかった。ノースは時々気鬱症に悩むが、いつもの鬱状態になった。その他の者はよく眠り、傷に包帯をして、一日中歩き回り、食欲もあつた。彼ら／彼女らの脈は少し高かったが、とくに異常はなかつた。

十二日土曜日。午前、傷を診察した。あまり炎症はなく、普通の傷に見られる化膿傾向があるのみである。接種に使つた材料は十五時間から十六時間保存したものであつたために材料に欠陥があり、不活発になつていたことを疑つて、新鮮な材料を探した。それをクライスト病院で発見したので、夕方六時ころ、彼ら／彼女らのうち五人の腕に別の切開をして、前同様に接種した。六人目のエヴァンスには材料が残つていなかったのでしなかつた。

十三日日曜日。午前、これら五人全員は両腕の痛みを訴えた。包帯を取つたところ、全員の最初に切開したところに炎症があり化膿していた。しかし、吐き気はなかつた。脈はかなり高く、尿は濁つていた。

十四日月曜日。午前、五人全員に赤い斑点と発赤が現れた。この中でもメアリー・ノースの顔、頭、胸にとくに多かつた。アン・トンピオンもほぼ同様であつた。吐き気、頭痛、のどの渴きなどは訴えなかつたが、夜になつて少々吐き気、頭痛、のどの渴きを訴えた。脈は高かつた。

十五日火曜日。午前、新しい同様の性質の赤い斑点と発赤

が新しく出たが、その後青白くなり、夜には黒ずんできた。それでも何の異常も訴えなかった。

六番目のリチャード・エヴァンスは昨年九月に牢獄で天然痘に罹ったことがあった。エヴァンスの切開した所には痛みも熱感も炎症もなかったばかりではなく、その他の変化も認めなかった。切開したところは最初から青白く、昨日は完全に乾いた。

十六日水曜日。彼らの状態は前日と同様であるが、切開から濃い膿性の分泌物が出始めた。アン・トンピオンの腿の屈曲部と右腕の外側部に大きな黄色い天然痘様の膿疱が出た。ジョン・オールコックの顔と腕に新しい膿疱が出て、夜になつて少し熱感があり、尿が混濁した。ジョン・コートリーの左の頬に大きな黄色い膿疱、顔に数個の小膿疱が出た。

十七日木曜日。オールコックにかなりの数の膿疱が出たが、膿疱の多くは黄色く消化された膿をもち、その基底部が赤かった。しかし、吐き気はなかった。アン・トンピオンの右腕と腿の黄色い膿疱は同様で、顎と口の回りに新しい膿疱が出た。

十八日金曜日。オールコックの天然痘はまだかなりある。膿疱は黄色く、その基底部は鮮紅色をし、膿疱はより満ちてより大きくなった。その他の者も切開をしたところから分泌物が出、ほぼ同様の状態である。

十九日土曜日。昨夜オールコックはなぜだか分からないが、自分の手の届くところにある膿疱を全部針で刺し、口をつけ

た。その結果、膿が出て、膿疱はより早く癒になった。しかし、膿疱の基底部は赤かった。切開からの分泌も減少した。

ここに次のことを記録しておく。オールコックには一番多くの膿疱すなわち天然痘が出たが、二度目の接種にあたり材料が不足であったので、一方の腕にしか接種されなかった。

一方、他の四人は両腕に十分量接種された。

二十日日曜日、二十一日月曜日、全員前日と同じ状態である。他の四人の切開場所からは、まだ濃くて消化された黄色い膿が出ている。

両腕の二度目の切開場所からも大量の分泌がある。切開からの分泌は発疹を促進するよりは抑制しているように見える。これらすべての観点から、私は、全身に六十個ほどの発疹が出たオールコックと同様、全員が将来の感染からすべての点で安全であると信じる。

二十二日火曜日、二三水曜日。全員は引き続きよくなつてきている。切開からの分泌が止まると同時に傷は乾いた。

二十四日木曜日。オールコックとコートリーに初めて下剤をかけた。他の三人の女性に下剤をかけようとしたが、月のさわりがあつてやらなかった。彼女らの何人かはここ数か月間メンスが止まっていたのに、三人が同時に始まったのに驚いた。

二十八日月曜日。メアリ・ノースは完全に回復する前にどうしてか分からないが冷たい水を浴びたために、ひどい疝痛に罹り、二日間近く続いた。

三十日水曜日。三人全員に下剤を服用させた。効果があつてノースの痲痛は完全に治まった。

三十一日。退院させるために男性二人に再度下剤をかけた。翌日女性にも下剤をかけた。

九月六日、彼らは全員釈放され、それぞれの居住に帰った。

結論として、実験は五人全員で成功した。実験に使った人の年齢、習慣、環境を考慮すると、これは私が期待した以上であった。ティモニイ医師が書いたこの術に関する報告、私がトルコで観察したすべての人の経験に対しても完全に答えるものであつた。

私はここでトルコの有名な商人クツク氏が、ニューゲートで行われた私の実験に関する公聴会で行った宣誓に触れないわけにはいかない。彼は、接種された人を見、切開痕と発疹とを十分に考慮して、彼がトルコで観察した非常に多くの例と同様であり、これらの人は天然痘に二度と罹らないことが保証されたとはっきりと宣言した。

それから、このこと全体を通して、術前には希望を持たせるような好意的な環境にはなく、術後にも、特別の治療を行わず、発疹を促進するような薬剤も使わず、患者をベッドに寝かせておくこともなく、食事療法の助けを借りることもなく、すべてを自然にまかせたが、なにも危険なことが起こらなかつたという点で非常に注目すべきである。

一七二一年十月二日、しかるべき術前準備の後、私はクエ

ーカー教徒でハートフォートから三マイル以内にあるテンパルに住むトーマス・バットの娘で二歳半になる幼児メアリ・バットに接種した。四日目に顔と首に赤い斑点と発赤が出た。七日目か八日目まで、彼女は元気を遊んでいた。それから少し身体が気だるくなり、どの渴きを訴え脈が充ち早くなり新しい膿疱が出た。切開痕からは濃いよくこなれた膿が分泌された。彼女の全身には二十個を超えない数の発疹が出た。膿疱は三、四日ほど続いた後、乾いて落ちた。子供は完全に回復した。

このように非常にすべては順調であつた。しかし、その後起こつたようなことは、これまで観察したことがなかつたので、私が少なからず驚いた。その事件を簡単に述べると次のようなことである。バット家の六人の召し使い、そのうち四人は男性で、二人は女性であつたが、この人たちはこの子供が術を受け、膿疱が出たとき、全員で代わる代わるこの子どもを抱いて世話をしていた。彼ら／彼女らも私もそれがうつるものとは考えもしなかつたが、召し使い全員は直ちに数種類の異なる性質を持つた本当の自然の天然痘に罹つた。というのは、あるものは円い境界のはっきりした膿疱、あるものは小さい膿疱で連続し、あるものは融合性の膿疱であつたが、全員に非常に多数の膿疱が出た。しかも最後の融合性の膿疱が出た者は重症になつてほとんど助からない状態になつた。しかし、神のおかげで、病気の間に節制をしなかつた一人の女中を除いて全員回復し完全に健康になつた。

一七二一年十月十二日、私はハートフォードのウイリアム・ヒースの二人の息子、七歳のジョセフと三歳のベンジャミンに人痘法を行った。二人とも同じ材料を使って、同時に行った。下の子供はすべての点で、前記のメアリ・バットと同様、非常に穏やかなよい性質の膿疱が出た。しかし、上の子のジョセフは太っていて、不潔で、大食漢であるばかりではなく、私が母親にしつかり与えた、食事の規則と暖かくしているという指示を守ろうとしなかった。この子は発疹が出る前から重症になり、多くの連続した小さな膿疱が大量に出た。しかし、ようやく回復して元気になった。

この二人の少年になんと大きな相違があることか。その理由は簡単なように見える。よい性質の病気に罹った年少の少年は清潔な習慣をもち、適度の食欲があり、この期間中よく節制をした。一方、年長の少年は私が前に述べたように太って、不潔な体質であつたばかりではなく、あくことを知らない食欲があり、常に消化の悪い食べ物、例えばチーズ、脂濃い田舎風ブディング、冷やしたポイルドビーフのようなものを、おなかいっぱい食べていた。その現場をたまたま私は見たことがある。術を受けて三日目に彼を家に閉じこめておくという注意がなされなかつたために、寒くて、風の強い、霜の降りるような天候の日に彼は一度脚を水で濡らしたことがあつた。もし、彼が感染によつて天然痘に罹つたのであれば、人間は彼の命を救うことはできなかつたであらう。それ以来、

術前に不潔な癖を完全に取り去り、厳格に節制させることが非常に大事であることが分かつた。

また、次のことは接種された天然痘が感染力のある、正銘の天然痘であるということとをさらに証明する事実として非常に注目し値する。というのは、そのとき、ヒース夫人には約四か月になる母乳を飲んでいる幼児がいた。夫人が二人の息子の看病をしている間、その子は彼らと同じベッドに寝せられた。その子は孤立性の自然の天然痘に罹つたが、間もなく完全に回復した。ヒース夫人は夜も昼も常に彼女の子供たちとおり、いつも抱いたり世話をしたりした。彼女は数年前に天然痘に罹つたことがあつたにもかかわらず、彼女の顔や手に数個の発疹と膿疱が出た。しかし、吐き気も身体の衰調もなかつた。このようなことは天然痘に罹っている人を世話したり、肌着を洗つただけの人にもよくあることである。

その後間もなく私は王室付弁護士ヒューズ氏に会つた。彼はハートフォードから帰つたらハンチングフォードベリーにある彼の家の二人の子供を診てくれるように頼んだので、私はそれを約束した。彼らを訪問したとき、彼の一八か月になる息子は天然痘に罹つていた。私は直ぐこのことを彼に知らせ、三歳ほどになる娘を近所の紳士の家に預けさせた。ヒューズ氏は私に息子の世話をすることと、もし、天然痘がよい性質のものであればその子から採つて娘に人痘接種するよう頼んだ。その少年は良好な孤立性の型で、そう多くの発疹もなく完全に回復した。しかし、後日談になるが、この少

年は天然痘に罹るずつと前から罹っていた頬と上顎のがん性の腫瘍から出血し死亡した。

話をもとに戻すとき、私は丁度よい時期に彼から材料を採って、軽く下剤をかけて十一月十七日に彼の姉に接種した。

彼女は二十四日に吐き気を訴え、それから二日後によい性質の天然痘が現れた。その膿疱は十二月三日まで腫れて成熟した。それから平常通り痂になり落ちた。

この若い患者は全身に二千個以上の膿疱が出たが、孤立性の自然の天然痘で最も普通に観察されるような性質のもので、腫れて成熟し落ちた。それでも全経過中、彼女は一日たりともベッドにはいず、夜間の看護も必要でなかった。普通の天然痘にある苦訴も症状もなかったばかりではなく、全く癍痕を残すこともなかった。

十二月二日のポストマン紙に、この例に関する誤った報告が載った。私が知らない間に、この紳士自身が聖ジェイムズ紙の十二月七日の夕刊でこれに反駁した、ということを書べておくのは適当なことであると考ええる。

十二月十七日に私はロンバート通り、クレメントレーンにあるジョン・コルト氏の子供たちに人痘法を行った。一人は七歳の男児で、もう一人は四歳くらいの女児であった。二人は最初に内科医の指示により、きちんと準備された。二人は二十四日に吐き気を訴えた。二十六日には少女に、二十七日には少年に天然痘が現れた。それらは穏やかで、一月三日か四日までに充ち、熟し、それから普通通り乾いた。これら

べては良性の円い膿疱で、それぞれの子どもたちには少なくとも三百個の天然痘が出た。少年の方が多かった。少年の発疹は妹に比較して遅く始まり、長く続いた。接種した材料は同じものであり、接種した量も同じであったので、この差はただ二人の体質と体液の相違によると考える。

その間、二人のどちらも最初から全く病気になるなかったし、ベッドにいるように強いる必要もなかった。この病気が一般に持つ危険な悪い症状も、重大なこともなかった。

二人が完全に回復したので、一月十三日、日曜日にコルト氏の六歳ほどの子供に三番目に術を行った。彼は二人の同胞と一緒に一月前に受ける予定であったが、そのころ身体具合が悪かったのではなかった。

彼は二十日までは元気で機嫌がよかったが、その後、病気になるに熱っぽくなつた。それから二十一日に天然痘が現れた。それから三日後には発疹の出るのがほぼ終わった。発疹は境界がはっきりした円い形に成長し、自然の天然痘の孤立型のように充ちて黄色くなつた。そのまま進行して二十九日か三十日には通常通り痂になつて落ちた。この子供の身体には前に述べたヒューズ氏の子供たちのように非常に多くの発疹が出たが、完全に回復した。彼はこの間に他の子供と同様、数人の有名な内科医の診察と町のお偉方たちの訪問を受けた。彼らは異口同音にそれは完全な天然痘であることに同意し、この実験に十分に満足したと宣言した。

私はここで、退屈な繰り返しをできるだけ避けるために彼

らの病気の初めに出る少しの熱と赤らみや、一般にすべての例に認められる細かいことや、術の前後に行われる適切な排出療法について知らせるつもりはない。しかし、その理由が簡単で明らかである次の観察について述べることをお許し願いたい。すなわち、切開したところからの分泌が多ければ多いほど、逆に一般に発疹の数が少ない、ということである。

この大きな利点は、証明される確率が高いであろう。結論として、私がこの狭い範囲で集めた少数の例から、最高に満足のいくやり方で、ここで起こされた天然痘は本当の天然痘であり、若い人にも年をとった人にもいつでもすることができ、再感染の危険がなく、最後に、この術は全体として慎重に行われれば常に安全で有用で、常に確実で、歓迎されるものであるという、いくつかの非常に明らかで有用な観察がなされ、疑いのない証拠がもたらされるべきである。

ハートフォードシャーの証明書

(一)

次のことを証明する。エリザベス・ハリソン ニューゲートで接種された五人のうちの一で、ここ十週間ハートフォードのクライスト病院の建物の中にある私の家に住んでいた。そして、その間我が家の召し使いである女中と、その後、この病院に属する少年に付き添った。両者とも本当の天然痘に罹っていた。そして、上記の少年と病気の間中同じベッドで寝たが、彼らから病気に感染しなかった。そのことこの目撃

者として

一七二一年十二月四日

母 プリフ・モス
娘 サラ・モス

我らが面前にて署名す。

ロバート・ピスコウ

クリストファー・シャープ

(二)

次のことを証明する。外科医チャールズ・メートランド氏は、私の娘で、二歳半になるメアリに十月の初めころ天然痘を接種した。少数の発疹が出たのみで、十五日後には完全に回復した。私の家の六人の召し使いは天然痘に罹った。それは上記の私の娘をしばしば抱いたり世話をしたりした結果であると信じる。彼ら／彼女らはその間外部の人や家族との交流はなかった。それで、私は私の子供は本当の天然痘に罹ったと信じる。

このことについて証人として署名する。

一七二一年十二月七日

アン・バット

我らが面前にて、我々の雇い主夫人によつて署名する。また、我々は書かれていることが真実であることを知っている。

トーマス・ステイムソン

ジョン・ハッチンス

以上の二人はその子供から天然痘に罹った。
保証人 ハーチングフォー(ド)ベリーのアイ・オークス

(三)

次のことを証明する。

この十月十二日に、外科医メートランド氏は、ハートフォードに住む私の二人の息子ジョセフとベンジャミン・ヒースに天然痘を接種した。二人とも本当の天然痘であることが分かったが、その病気から完全に回復した。このことは、たまたま、次のようにして証明された。すなわち、私の四か月になる幼児は、私が接種された子供を看病している間、母乳を与えていた。この子は吐いたりして、数日間病気が続いた。その後、この子にかなりの数の天然痘が現れた。それから、同様に回復した。

保証人として署名する。

一七二二年十二月四日。

エリザ・ヒース

我らが面前にて署名す。

ナット・ストラットン

ウイリアム・アンドソン

トーマス・ストラットン

Z ——— 子供の看護をした看護婦ワーナーの記号。

(仙台市)